

令和3年度 自己評価表

鳥取県立鳥取西高等学校

| | |
|-------|---|
| 教育目標 | 藩校「尚徳館」の「文武併進」の精神を受け継ぎ、高い志を持ち、幅広い教養を身につけ、社会の進歩・発展に貢献する創造性豊かな人間を育成する。 |
| 中長期目標 | <ol style="list-style-type: none"> 1 生徒が学問の意義に目覚め、深く学ぶことの喜びを実感できる質の高い教育を推進する。 2 生徒が確かな学力を身に付け、自己の将来像を描き、進路目標を実現できる教育を推進する。 3 生徒に良識を培い、自律と規範、自立と共生の精神を涵養することによって、社会のリーダーとなる素養を育てる。 4 教科の学習とともに、部活動や学校行事等の体験的活動への積極的参加を通じ、知徳体のバランスのとれた人間の育成を図る。 |

| | |
|----------|--|
| 今年度の重点目標 | <p>『深い学び』『幅広い学び』を通じて新時代を創造するリーダーの育成を図る</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 学問の奥深さに触れ、深く学ぶことの喜びを実感できる授業を研究・実践する。 ② 「大学進学重点校」として、生徒が高い進路目標に挑戦し、その目標を実現する。 ③ SSH事業を組織的に推進し、生徒の幅広い科学的素養を醸成すると共に、新時代を創造するリーダーを育成する。 ④ 生徒の良識を培うと共に、挨拶を含め生徒の社会性を高める。 ⑤ 部活動に積極的に参加し上位大会を目指すと共に、スポーツ・文化芸術等各種大会・コンクールへも積極的に挑戦する。 |
|----------|--|

評価基準 A:十分達成 [100%] B:概ね達成 [80%程度] C:変化の兆し [60%程度] D:まだ不十分 [40%程度] E:目標・方策の見直し [30%以下]

| 年度当初 | | | 評価結果(2月) | | | | |
|------------------------------|---|--|--|--|---|----|--|
| 評価項目 | 評価の具体項目 | 現状 | 目標(年度末の目指す姿) | 目標達成のための方策 | 経過・達成状況 | 評価 | 改善方策 |
| 深く学ぶことの喜びを実感できる授業の研究・実践 | <ul style="list-style-type: none"> ○学問の面白さを伝え、自ら学ぼうと挑戦する意欲を育む授業を推進する。 ○主体的に学び合い、切磋琢磨しつつ成長できる機会を増やす。 | <ul style="list-style-type: none"> ○授業アンケートで、「授業や行事により教養や関心の幅が広がった」「自ら学ぶ意欲が高まった」とする生徒の割合が約90%となっている。 ○「授業や各種の行事により、教養や関心の幅が広がっている」と回答した生徒は90%、「学習の深まりとともに、自ら学ぶ意欲が高まった」生徒の割合は86%である。 ○総合的な探究の時間などの取組により論文やポスター等に表現する力が養われてきた一方で、課題研究の方法に課題が残っている。 | <ul style="list-style-type: none"> ○授業アンケートで、「授業や行事により教養や関心の幅が広がった」「自ら学ぶ意欲が高まった」とする生徒の割合が90%以上を維持している。 ○対話的・探究的な学びによって学問の奥深さに触れる質の高い授業を展開することで、生徒の学問や研究に対する関心、意欲が高まるとともに、多くの生徒がグローバルな視野で物事を考えている。 ○各種研究会・学会や大会等に参加する生徒が250人以上(昨年度約220人)となり、また60人以上(昨年度約60人)の生徒が上位入賞している。 | <ul style="list-style-type: none"> ○学習の内容や手法等についての情報共有や教科間の連携を通して、知の世界の豊かさや深さに触れる授業を実践する。 ○SSH及びSGHを通して、課題研究を推進し、生徒の探究学習を深化させる。 ○国内外との交流の機会をより多く提供し、生徒への情報提供と経験を共有できる場を設ける。 ○課題研究メソッドを活用して、研究作法を徹底するとともに、学習評価に関する指標を工夫し、論文やポスターの質的向上を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ○生徒へのアンケートで「授業や各種の行事により教養や関心の幅が広がった」生徒が91%、「自ら学ぶ意欲が高まっている」生徒が87%だった。 ○SSH事業等において対話的・探究的な深い学びや教科・科目横断授業、課題解決を意識した授業、ICTの積極的な活用に取り組んだ。また、授業研究会や外部講師による授業を実施し、社会とのつながりを意識させる授業ができた。 ○各種研究会・学会や大会等に参加した生徒数は238人、そのうち上位入賞者数は41人(2/4 現在)だった。 | B | <ul style="list-style-type: none"> ○Chromebook等ICT機器をさらに活用し、生徒の主体的な学習への取り組みを推進する。 ○感染症対策から始まった各種リモート学習やオンラインでの学習支援などが効果的に行えるように研究を推進する。 ○新学習指導要領の研究を更に進め、新しい教材の開発を積極的におこなうとともに、その効果を検証し改良を進める。 ○SSH事業を活用し、講師招聘するなど、連携授業、特別講座等を実施するとともに、生徒の各種研究会への参加を働きかける。 |
| 確かな学力と高い進路目標に挑戦し、その目標を実現 | <ul style="list-style-type: none"> ○高い進路目標に向かう姿勢と態度を育むための取組を充実させる。 ○SSH事業への積極的な取り組みを通して、科学的素養の醸成とリーダーシップの育成を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ○年間カリキュラム一覧表を活用した教科横断的学習など、学びの深まる教材の開発や授業実践に向けて取組んでいる。 ○ESDやSDGs等の視点による探究的な学びを通して、リーダーとしてグローバル/ローカルな課題に挑戦する意欲を高めている。 ○大学合格者数において、今春国公立大学212名、難関10大学・医学科46名となっている。 ○きめ細やかな面接指導や自宅学習時間調査、各種調査を通して、生徒の学習意欲の向上や進路意識の育成に努めている。 | <ul style="list-style-type: none"> ○教科横断的学習など、学びの深まる教材の開発や授業実践が全ての教科で行われている。 ○SSHにおける課題研究や海外交流などの活動への参加を通じて、リーダーとしての資質やコミュニケーション能力が育っている。 ○SDGsと結び付けた図書館活用シラバスを活用するなど、生徒が積極的に図書館を利用している。 ○大学合格者数が国公立大学230名、難関10大学・医学科60名を超えている。 ○面接指導や自宅学習時間調査などを通して、生徒の学習意欲の向上や進路意識の育成を継続している。 | <ul style="list-style-type: none"> ○各種研究会の成果や教科を越えた授業公開等を基に、教科横断的な授業の研究を進め、学びの深まる授業を継続的に研究する。 ○各種調査や面接指導の結果を踏まえながら生徒の状況を教員間で共有し、より高い進路目標の維持・達成のためのきめ細かな指導を継続していく。また、学問研究の成果が自らの諸活動へ繋がるよう指導する。 ○総合的な探究の時間及び課題研究等の取組を通して、ESDやSDGs等の視点から多様な社会的課題や科学的関心を高める機会を提示し、生徒の優れた能力を引き出して、知的総合力をもった集団の育成を目指す。 | <ul style="list-style-type: none"> ○授業公開の推進に努め、教科横断型の授業や生徒の主体的な活動を引き出す様々な取り組みがおこなわれた。 ○SSH等の事業を活用し、海外(オンライン)や国内の研修を実施し、リーダーとしての資質やコミュニケーション能力を育成した。 ○図書館で教科横断授業やICT活用のための様々な支援をおこなった。 ○希望者に放課後講座を実施し、生徒の学習意欲向上に努めた。 ○面接を丁寧に行い生徒の学習意欲の向上や進路意識の育成に努めた。 | B | <ul style="list-style-type: none"> ○新学習指導要領の趣旨を生かした授業実践や観点別評価の適切な運用などを通して生徒の自発的学習や深い学びを引き出す取り組みを行う。 ○授業公開や学校訪問の実施、各種研究会への参加を行い、その成果を生かして学びの深まる授業の研究を継続的に進める。 ○教科・科目間の連携を進め、学際融合型授業実践が更に多くの授業等で取り入れられるようにする。 ○面接や個別指導など生徒個々への対応を継続して行う。 |
| 良識を培い、社会性を高めるための指導の推進 | <ul style="list-style-type: none"> ○良識を培い、社会性を高める取組を推進する。 ○挨拶ができ、円滑なコミュニケーションを図ることのできる生徒を育成する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○様々な社会問題の学びにおいて、自らの課題と捉える姿勢が見られるようになったが、課題の多面性や複合性のさらなる理解が望まれる。 ○職員が連携し、生徒の発達段階に応じた適切な支援を行っている。 ○「一人ひとりが規則やきまりを守り、はじめのある生活をしている」と回答する生徒は92%となっているが、校内での挨拶は不十分である。 | <ul style="list-style-type: none"> ○SDGs等の学びを通して、自ら自身の社会規範を学ぶだけでなく、社会における文化的な背景や歴史を考慮しながら社会課題を解決しようとしている。 ○礼儀正しく適切な受け答えができ、また自分の意思を自らの言葉で表現できる者が増加している。 ○職員の連携により、生徒の発達段階に応じた適切な支援が継続、充実している。 ○「一人ひとりが規則やきまりを守り、はじめのある生活をしている」と回答する生徒は90%以上を維持し、自ら進んで挨拶ができる生徒が増加している。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ペアワークやグループワーク等の協調的な活動場面をとおして、コミュニケーションや協働性を高める。 ○様々な社会問題についての学びを通して、課題の多面性や複合性をさらに深める。 ○規則の意味を理解し、挨拶を励行するなど、マナーを身につけた生活ができるよう促す。また、情報モラルを基本的な生活習慣とともに身につけさせる。 ○保健室・教育相談の役割を充実させるとともに、面談やhyper-QUアンケートを活用し、生徒理解を深め、個に応じた相談活動を行う。 ○学校運営協議会を導入し、様々な立場で出された意見を学校運営に反映させる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○県内外でのフィールド研修を通じて、社会課題を解決する意欲や関心を高めた。 ○保護者と学校の連携のもと、多くの生徒が節度と良識のある生活を送った。自転車・マナーや情報モラルについては継続的な指導が必要である。 ○学年と生活指導・教育相談・保健室と緊密に連携し適切な指導や支援に努めている。 ○「一人ひとりが規則やきまりを守り、はじめのある生活をしている」と回答した生徒は91%、「一人ひとりが人権の尊重された学校生活を送っている」と回答した生徒は95%だった。 | B | <ul style="list-style-type: none"> ○地域の課題に関心を高める研修が多くあり、これを引き続き大切にしながら、さらに視野を広げた研修を準備する。 ○保護者と学校が連携協力しながら、挨拶、マナー、情報モラルについて継続的に指導し、生徒の人間の成長を多方面から支援する。 ○今後も学年と生活指導、保健室、教育相談室と連携を図り、生徒の心身の健康管理に努める。 ○学校運営協議会委員より様々な視点から助言をいただき、生徒の社会性を育むための方策を考える。 |
| 部活動や文化芸術活動等各種大会・コンクールに積極的に挑戦 | <ul style="list-style-type: none"> ○あらゆる活動を校内にとどめず、対外的な舞台へ積極的に挑戦する。 ○生徒の活躍に関し、校内外に積極的に情報発信する。 | <ul style="list-style-type: none"> ○教科の働きかけにより対外的な発表の場に参加する生徒が増えた。 ○生徒が主体的に生活のあり方を考えられるようにしてきた。運動部文化部ともに多くの部活動が上位大会へ進出している。 ○情報発信は、主に本校の公式ホームページでおこなっているが、アンケートの結果、HPをよく見る、時々見ると答えた保護者は6割前後である。 | <ul style="list-style-type: none"> ○情報提供の継続により、生徒が対外的な各種大会等に積極的に参加している。 ○部活動のあり方を踏まえた部活動計画を立てて実施することで、生徒が学習と部活動を両立している。 ○県大会ベスト4以上の運動部活動、中国大会以上の文化部活動が増加している。 ○多くの保護者が、本校では必要な情報が迅速かつ適切に提供されていると思っている。 | <ul style="list-style-type: none"> ○研究会等での成果を校内発表会や授業を通して多くの生徒にフィードバックする。 ○対外的な大会、発表会等への参加について、SSH予算を活用するなどして、積極的な参加を支援する。 ○生徒どうしや教員どうしの連携を密にし、個々の生徒に応じた支援を行う。 ○これまでの情報発信を継続すると共により効果的な情報発信方法を検討し、新しいメディアの活用にも取り組む。 | <ul style="list-style-type: none"> ○理科や地理で各種大会への参加者の増加や上位の成績受賞者の輩出などの成果を挙げた。 ○県大会ベスト4以上の運動部活動は12、中国大会以上の文化部活動は8だった。 ○ホームページやマチコミ、Facebookなど様々な方法で例年以上に多くの情報発信を行ったが、「学校からの情報提供が迅速かつ適切に提供されている」と感じている保護者は50%だった。 | B | <ul style="list-style-type: none"> ○課題研究APの開始で更に活躍が広がるよう生徒への支援を継続する。 ○部活動の情報収集のための積極的な図書館利用をアピールしていく。 ○様々なコンクールや大会の案内を引き続き行うとともに、授業での取り組みを対外的に発表するような機会を増やす。 ○積極的な挑戦を後押しすることができており、継続していく。 |
| 業務改善の取組 | <ul style="list-style-type: none"> ○会議や委員会の在り方の見直し ○長時間勤務者の解消 | <ul style="list-style-type: none"> ○連日会議等が開催される時期がある。 ○構成員が多すぎる会議や委員会がある。 ○昨年度は、時間外業務時間が45時間/月超の職員は月平均2.4名、360時間/年超の職員数は11名だった。 | <ul style="list-style-type: none"> ○委員会の種類、構成員共に適切で、必要な会議が短時間で効率よく行われている。 ○時間外業務時間45時間/月超の職員が5名未満、360時間/年超の職員が10名未満となり、業務改善が進んでいる。 | <ul style="list-style-type: none"> ○委員会や構成員を見直す。 ○事前の会議資料を提示することによる時間短縮や、持ち回り会議について検討する。 ○時間外業務が多くなりそうな職員に声をかけ、事情を聞きながら縮減の方策を探る。 | <ul style="list-style-type: none"> ○会議の多くは短時間に効率よく行われた。また、PC採点システム導入により、採点業務が軽減された。 ○45時間/月超の職員は月平均5.8人、360時間/年超の職員が10人だった。 | C | <ul style="list-style-type: none"> ○会議の精選、実施方法、構成員の検討、ICTによる業務効率化を図る。 ○適切かつ柔軟な校務分掌の配置を行う。 ○部活動計画表の確認により計画段階で時間外が多い職員には計画修正を依頼し、時間外業務の縮減を図る。 |